

樟 蔭 学 園 報

Vol. 182
2020 Spring

くすのき

Kusunoki



「田辺聖子文学館」開館時の田辺聖子さん

CONTENTS

● 巻頭特集

田辺聖子の歩んだ道

田辺聖子文学館 中西 進 館長

1

● こもれびの窓 — もっと自由に、自分らしく歌いたい 井前 瞳さん

3

● WingBEAT! — 留学で磨いた英語で通訳ボランティアに挑戦

●●●●さん

5

● 未来に輝く☆チカラ — 特殊メイクと最新技術をさまざまな場面で生かしたい

●●●●●さん

6

● NEWS — くすのき祭&若葉祭 ほか

7

● CLUB NAVI — 中学校 ソフトボール部

15

● Information — イベントのお知らせ など

17

● リレー★コラム 豊島 久美子 准教授

私のイチ押し! 青木 健地 先生

オススメレシピ 監修:くすのき健康栄養センター

19



はばたけ、知性。

田辺聖子の歩んだ道

大阪樟蔭女子大学 田辺聖子文学館 中西 進 館長

樟蔭の卒業生である作家・田辺聖子さんが、昨年6月6日に逝去されました。田辺文学を高く評価し続けてこられた中西進館長に、若くして類まれなる才能を発揮し、次々と著作を発表して人気作家となった田辺さんの足跡を振り返りながら、その文学の魅力や、次世代への期待をお話いただきました。



●古典文学に親しんだ田辺聖子の樟蔭時代

田辺さんが樟蔭女子専門学校に在学しておられたのは、1944年から1947年という大変な時代でした。戦争が激化する時には、環境が突然ガラリと変わってしまうものです。私が当時住んでいた東京でも、終戦の半年前までは普通の生活が営まれていました。それが急に食べ物がなくなり、空襲が始まったのです。田辺さんも大阪で、そういう日々を過ごされたのでしょうか。

周囲の環境が一変するなか、樟蔭で古典文学に親しんでおられたようですね。まるで『源氏物語』に心を踊らせた『更級日記』の作者、菅原(すがわらの)孝標女(たかすえのむすめ)のように、大好きな物語を読みふける文学少女だったのでしょうか。残された樟蔭時代の文章からも、ものを書くのが大好きな少女だったことが伺えます。



中西 進(なかにしすすむ)
大阪樟蔭女子大学田辺聖子文学館館長
東京都出身。東京大学大学院博士課程修了。文学博士。万葉集、源氏物語など古代文学の比較研究を中心に、日本文化の研究・評論活動で知られる。『中西進 日本文化を読む』(全6巻)、『中西進著作集』(全36巻)、『中西進 万葉論集』(全8巻)ほか著書多数。1970年、日本学士院賞を受賞。2005年、瑞宝重光章を受章。2013年、文化勲章を受章。

●書く才能を温かく育む樟蔭という環境

古典文学に親しみ、自らも文章を書く才能を示した田辺さんを温かく育んだのは、樟蔭という環境でした。女学生の才能を優しく包み込む学び舎であることは、女学校では基本の姿勢だと思います。

今も文章において、ひらめきや才能を見せてくれる少年少女たちはたくさんいます。ただ、それは生涯をかけて持続する才能とは異なるものです。芥川賞なども若い人たちのきらめく才能をすくい上げる文芸賞です。しかし、芥川賞作家が長編作家、文豪への道を歩むかという、必ずしもそうではありません。

田辺さんはそんな中において、少女時代からの初々しさを失うことなく、作家としての才能を育て上げ、文芸という名の砦を築かれた数少ない文筆家の一人だと思います。

●人に寄り添い時代を超えた言葉を紡ぐ

私は、1974年頃に『文車日記』と出会って以来、今日に至るまで田辺さんの作品を愛読し、その才能に魅かれ続けてきました。もし代表作を挙げるならば、初期の作品では、前述の『文車日記』。これは研究者とは異なる独自の視点で古典文学の楽しさをつづった随筆集です。次に、岸本水府をはじめとする大阪の川柳作家たちの人間群像を爽やかに描き上げ、水都・大阪のモダンな姿を紹介する『道頓堀の雨に別れて以来なり』を挙げたいと思います。

さらに江戸時代に仲良しのオバちゃんたちが、お伊勢さんなど各地の名所を巡る道中もの『姥ざかり花の旅笠』。これは比較的最近の作品で、古典文学の知識を基盤に江戸時代の文化・風俗が見事に活写されています。また、与太郎と熊八なる人物を登場させ、江戸の



庶民感覚溢れる愉快的な会話を展開させながらも、一方で田辺さんならではの普遍的な文学論、人生哲学が垣間見える『田辺聖子の小倉百人一首』なども挙げておきます。もちろん『源氏物語』の翻訳にも田辺さんならではの豊穡な古典文学の世界が展開されているのが感じられ、これもぜひ後世に残すべきものです。

●田辺文学を豊かにする大阪弁の言葉と音

田辺さんの文学は深く、日本人の庶民感覚を通して創作されたものであり、この点日本人の普遍的な姿と心の象(かたち)を訴え、多くの共感を得ています。文章の妙を心得た作品に楽しさや笑いを感じつつ、人間の奥深さに気付かされてきました。まさに文章の達人と呼ぶべき作家だと思います。

また、大阪弁にこだわり、作品を書き続けたことも忘れてはならないでしょう。この姿勢は司馬遼太郎さんにも通じるところがあります。関西弁は温もりのある、温かい心が感じられる言葉です。田辺さんの作品から大阪弁の言葉、音を奪ったら、文学が痩せてしまうのではないのでしょうか。言葉は声に出して読むものであり、聴くものであり、音読するとその中に秘めたものが現れます。

●「田辺聖子文学館ジュニア文学賞」の意義

「田辺聖子文学館ジュニア文学賞」は、本当に意義が大きいものです。毎年全国の中学・高校生からたくさんの応募があります。生徒の文芸創作活動に力を入れる「強豪校」からは、学校を挙げての応募があります。この賞は、文章を書く中高生たちの目標の一つになっているのです。今年度で12回を数えますが、着実に実績を積み上げてきたと感心しております。私はご縁があって文学館の館長を懇請され、

ジュニア文学賞の審査委員長まで務めております。この賞が若い人々に一生懸命文章と向き合う機会を提供し、みなさんの文章のレベルを高めていることも、素晴らしいことだと感じています。

このジュニア文学賞が、文学好きの若者にとっての登竜門になってほしいと思っています。



ジュニア文学賞創設記者会見時の中西館長と田辺さん(2008年)

profile

田辺 聖子(たなべ せいこ)

1928(昭和3)年、大阪市此花区(現・福島区)生まれ。樟蔭女子専門学校(現・大阪樟蔭女子大学)国文学科卒業。1956(昭和31)年に「虹」で大阪市民文芸賞を受賞、1958(昭和33)年、初の単行本「花狩」を刊行。1964(昭和39)年には「感傷旅行(センチメンタル・ジャーニー)」で第50回芥川賞を受賞。その後も女流文学賞(1987(昭和62)年)、日本文芸大賞(1990(平成2)年)、吉川英治文学賞(1993(平成5)年)、菊池寛賞(1994(平成6)年)、泉鏡花文学賞(1998(平成10)年)、読売文学賞(1999(平成11)年)、蓮如賞(2003(平成15)年)、朝日賞(2006(平成18)年)などを受賞。1995(平成7)年に紫綬褒章を受章、2000(平成12)年には文化功労者に選ばれる。2007(平成19)年に母校である大阪樟蔭女子大学に「田辺聖子文学館」が開設された。2008(平成20)年に文化勲章を受章。2019(令和元)年6月6日逝去。

こもれびの
vol.40もっと自由に、
自分らしく歌いたい

ジャズシンガー

井前 瞳さん

1997年3月
樟蔭女子短期大学 英米語科卒業

軽やかに、時に大胆に、心にしみる歌を歌い上げる井前瞳さん。樟蔭短期大学で英語を磨き、一旦は社会に出てから一念発起して、ジャズの世界に飛び込みました。単身ニューヨークへ渡り、猛勉強して身につけた本場仕込みのヴォーカルは、今夜もどこかのライブハウスで観客を魅了しています。

◆英語の基礎を身に付けた樟蔭時代

短期大学の英米語科に入学したのは、外国映画が好きだったから。卒業後は翻訳家になって、映画の字幕を作る仕事をしたかったと。その頃は思っていたので、樟蔭には外国人教員が多かったことが魅力に感じ入学を決めました。授業はかなりハードで、英語の能力は鍛えられました。大変でしたが、「英語で気持ちを伝える練習」を何度も繰り返すことで根気強さが身につきました。この何度も繰り返す根気強さは、後に留学した際にも、現在ジャズを歌う上でも、本当にプラスになっていると思います。

樟蔭の2年間はあっという間で、毎日全力で勉強し、青春も全力で謳歌しました。授業が終わると、閑屋キャンパスを出てすぐの喫茶店で友人と集い、いろんな話をしたことを覚えています。若樟祭(閑屋キャンパス大学祭)での思い出など、樟蔭には素敵な思い出がいくつもあります。今も当時の友人たちが、ライブに駆け付けてくれるなど交流が続いています。

◆一度きりの人生を後悔したくない

母がフォークシンガーだった影響で、私も幼い頃からピアノを習い、樟蔭では軽音楽部に所属していました。しかし本気でプロのジャズシンガーを目指そうと決めたのは、就職してからでした。卒業後は企業に就職しました。業務をこなすにつれ、「このまま年をとっていくのは不安だな。一度きりの人生だから何かにチャレンジしてみよう」と思い、親には相談せずに会社を辞めました。華やかな舞台に立ちたいと思い、オーディションをいくつか受けました。ヒーロー



いまえ ひとみ 三重県名張市出身。井前人美の名前で、ジャズヴォーカリストとして、関西を中心にライブハウスで活動するかたわら、個人レッスンの講師も務める。レパートリーは、スタンダードジャズからカーペンターズなどのアメリカンポップス、シャンソンと幅広い。近年、得意曲を中心とするCDもリリース。好きなジャズ作曲家はコール・ポーター。尊敬する歌手はエラ・フィッツジェラルド。実は伊賀流忍者、百地三太夫の子孫でもある。



学生時代の思い出

ショーの前座やMCで歌を披露したり、テーマパークで歌って踊ったりしていました。

ある日、ジャズバーに行った際、歌うジャズシンガーに魅了され、「私が求めているのはこれだ」と感じ、すぐにその時に歌っていたジャズシンガーに弟子入りさせてもらいました。このことがきっかけで、20代半ばでジャズの世界に飛び込みました。最初はジャズバーのスタッフとして働きながら歌の練習を続け、いつしかステージに立つようになりました。

◆ニューヨークで猛特訓の日々



お客さんの前で歌うようになったのですが、お客さんから歌う際の英語の発音が良くないと指摘されることが度々ありました。そう指摘される度に、とても悔しい気持ちが込み上げてきました。その思いから、ジャズについて更に深く学ぶため、本場ニューヨークに行くことを決意しました。2007年ニューヨークへ渡航し、半年間にわたってジャズボーカルの個人レッスンを受けたり、英語の発音を勉強したりしながら、ジャズや英語と真剣に向き合いました。ちゃんとした発音ができなくて、毎日悔しくて泣きながら練習したことを思い出します。挫けそうな時に、ニューヨークで出会った多くのミュージシャンに支えられました。留学したことで、ジャズの聖地であるニューヨークの生活、歴史、文化などを学ぶことができました。ジャズが生まれたルーツを知ることで、歌に込められた思いを感じ取ることができたことは、ジャズシンガーとして深みが増し、自信になったと感じています。

◆一人のジャズシンガーとして進み始めた

格闘の連続だった日々を経て、帰国後は一人前のジャズシンガーとして、自身で営業活動や契約などを行うようになりました。

現在は、関西を中心にライブハウスやジャズバーなどで歌を歌っています。私の声に「癒される」と言ってくれるお客様もいます。更に練習を積んで、もっと上手な歌手になりたいですね。また歌教室の講師も務めています。ニューヨーク留学中、びくびくしていても意味がない、堂々と歌を楽しむことを学びました。ジャズの楽しさは、アドリブで自由に歌えるところ。歌教室の生徒には、歌うことの喜びを感じてほしいと思い、遠慮せず精一杯歌うこと、努力を忘れないことをいつも伝えています。更に自身も歌のレッスンを今でも受け続け、努力を忘れず歌の磨きに力を入れています。

◆夢を諦めず続けることが大事

夢は誰もが納得するような歌手になること。目標はジャズの巨匠エラ・フィッツジェラルドのように、母性、パワー、優しさが備わった歌手になることです。樟蔭生には、夢を絶対に諦めないでほしいです。そして好きなことをやり続けてほしい。10年続ければ自分のものになると言われています。大人は一生懸命している人を応援してくれるので、夢を追って何かに納得するまで一生懸命やってみて夢をつかんでほしいと思います。

今後の活動予定

- 4. 8(水) 夙川 Piano CLUB 19:30～ 2ステージ
- 4. 19(日) 三ノ宮 サロン・ド・あいり 13:30～ 3ステージ
- 4. 25(土) 三ノ宮 Basin Street 19:30～ 3ステージ
- 5. 4(月) 和歌山マリーナシティ内 Gondwana 時間未定
- 5. 9(土) ホテル ラ・スイート神戸ハーバーランド グラン・ブルー 20:30～ 3ステージ



※予定は変更になる可能性があります。

卒業生の方々のご活躍の様子をお知らせください。

●TEL.06-6723-8152 ●FAX.06-6723-8263

さまざまな分野でご活躍されている卒業生の情報をお寄せいただき、みなさまの力をお借りして、この「こもれびの窓」で幅広い卒業生の姿をお伝えしていきたいと思ひます。身近でご活躍の卒業生の様子をぜひとも学園広報課までお知らせくださいますよう、お願いいたします。

留学で磨いた英語で 通訳ボランティアに挑戦

国際英語学科3年生 ●●●●さん

国際英語学科の●●●●さんは、本学から唯一、「G20大阪サミット2019」の通訳ボランティアとして参加し、海外のプレス関係者に関西の魅力を発信しました。留学をきっかけに「英語で交流する楽しさ」を知った●●さんの成長していく姿をご紹介します。

●必修の留学で多様な人々と交流

高校時代はテニスに明け暮れていたのですが、大学ではずっと興味があった英語をしっかりと勉強しようと思い、国際英語学科に入学しました。樟蔭は基礎から英語を学び直せることと、留学が必修だということが魅力でした。留学をモチベーションに頑張る学生に、優しく指導してくれる先生方。どんな小さなことでも丁寧に対応してもらえる素晴らしい環境です。

2年生になった2018年10月から約4カ月間、ニュージーランドのオークランド大学に留学しました。アジアや中東、欧州などから集まった人たちと同じ教室で学び、発表や議論などを通じて、「世界にはいろいろな考え方がある」と知りました。最初は英語を話すのが不安でしたが、「間違いを恐れず積極的に話せば、思いは必ず伝わる」と思えるようになったことは大きな進歩でした。以前は、「ネイティブの方から話しかけられるのが怖い」と思っていたのですが、帰国後は「笑顔で話せば何とか伝わる」と思うようになり、外国の方とも気負わずに話せるようになりました。

●G20で関西の魅力をアピール

もう一つの大きな体験は、昨年6月に大阪で開催された「G20大阪サミット2019」での通訳ボランティアに挑戦したことです。留学中に「関西の魅力発信ブース」で海外プレスなどに応対するボランティアスタッフの募集があることを知り、興味はありましたが、自分には務まるだろうかと心配で応募をためらっていました。しかし、「一生に一度のチャンス」だと勇気を振り絞って応募した結果、採用されました。

当日は会場で日本料理を紹介するグループに所属しました。ボランティアに参加して、スタッフで一緒だった他大学の学生の英語力の高さを目の当たりにし、不安になりました。それでも「精一杯笑顔で接すること」を心掛けて通訳を務め

ました。すると運営スタッフの方から良い笑顔だと褒められました。訳しにくい日本語の語彙を調べるなど事前準備が大変でしたが、所属ゼミの先生や英語教育センター(ELTC)のスタッフにサポートしていただき、何とか乗り切ることができました。このボランティアでの経験が更なる英語学習への意欲につながったと感じています。

●自分の可能性を伸ばし続けたい

更に昨年9月には、タイ・バンコクの泰日工業大学で、現地の大学生に日本語を教えました。国際英語学科の言語教育実践コースでは、日本語教員資格を取得することができます。取得するには、決められたカリキュラムを受講して単位を取得することと、2週間教育実習に行くことが必須です。実習先は国内か海外かで選択できるのですが、せっかくなのでタイでの実習を選びました。生徒は日本語を学ぶ大学生でした。学習者が授業で習っている限られた語彙と文法の中で授業をすることが大変でした。また、授業中に「関西弁」が出てしまうなど、日本語を教える難しさを実習中に経験しました。実習中にはいろいろな失敗もあったけれど、学ぶことも多かったです。

●帰国後の変化

これまでは何となく日本語教員資格の授業を受けていましたが、日本語教育は全てに関わってくると感じるようになり意識が変わりました。日本のグローバル化が進み、外国人が身近に増え、他人事ではないと思いました。「私は知らない」ではいけないと思い、最近では外国に関するニュースも見るようにしています。今は「やさしい日本語」に関心があるので、災害時におけるやさしい日本語活用について、もっと学びたいと思っています。外国人が日本人と同じようにもっと快適に生活できるような日本になってほしい。そして異文化のことを知り、お互いに相手を認められるような社会になってほしいと思っています。そのために、自分にできることを少しでも良いので行動することを心掛けています。留学、通訳ボランティア、教育実習と一歩ずつ前に進んできましたが、これからもどんどんいろいろなことにチャレンジして、自分の可能性を伸ばし続けたいと思います。

未来に輝く★チカラ



「トビタテ!留学JAPAN」日本代表プログラムでLA武者修行 特殊メイクと最新技術を さまざまな場面で生かしたい

化粧ファッション学科4年生 ●●●●さん

テレビや映画の世界でおなじみの特殊メイク。この不思議で魅力あふれる世界に魅せられ、化粧ファッション学科で学ぶ●●●●さん。さまざまな経験を積む中で、更なる成長を求めて「トビタテ!留学JAPAN」の日本代表プログラムに挑戦しました。

●特殊メイクに魅せられて

幼少の頃からモダンダンスをしていて、発表会などでメイクをしてもらうようになり、そこからメイクに興味を持ち始めました。初めはメイクをしてもらう側でしたが、次第に同じダンス仲間にメイクをするようになりました。そんな中、チェコのアニメ作家ヤン・シュヴァンクマイエルさんのアニメを見て、特殊メイクに興味を持ったことから、「映画の特殊メイクの仕事に就きたい」と思うようになりました。化粧ファッション学科への入学を決めた理由は、大学の学科としては日本で唯一、化粧とファッションが学べること。しかも、ハリウッドでも著名な江川悦子客員教授の指導が受けられることが決め手でした。化粧ファッション学科では、メイク以外にもファッションやヘアー、グラフィックデザイン、商品企画など多様な技術や知識が幅広く学べるので、メイクをする上でとてもプラスになっています。

大学で学んだ知識や技術を生かし、在学中から学内外のファッションイベント企画、ホテルのインテリアデザインなどに挑戦してきました。関西圏の美容、服飾学生や大学生が集結して開催する学生ファッションイベント「BEATNIXS」では、メイク担当、モデル、クリエイティブ統括リーダーとして活躍しました。また授業で、東大阪市の婚姻届けのデザイン作成に挑戦し、採用もされました。在学中から積極的に行動していたので、発表の機会を多く持つことができたことは自信につながりました。

●LA留学で最新技術を学ぶ

特殊メイクについて学ぶ中で、エピテーゼ(義手や義眼、義耳など)という技術を知り、福祉や医療の現場でも特殊メイクを生かせる可能性があると思いました。3年生になった春、映画とエピテーゼ制作の本場であるアメリカ・ロサンゼルスへの留学に憧れるようになっていました。しかし、留学費などのことで無理だろうと諦めていました。そんな時、先生から海外留学奨学制度「トビタテ!留学JAPAN」の日本代表プログラムについて教えてもらい、挑戦してみたいと思うようになりました。就職活動の準備を中止して応募したのは冒険でした

が、幸いにも私の留学プログラムは採用されました。お陰で2018年夏から約1年間、ロサンゼルスにある語学学校、特殊メイクの学校に通い、特殊メイクの工房でのインターンを体験しました。更にUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)歯学部でもエピテーゼの第一人者から学ぶことができ、アメリカでの留学はとて多くのことを吸収することができました。

留学中、英語が思うように伝わらず、自信を無くしたこともありましたが、彫刻の作品作りで、先生に褒められることができました。作品を完成させ、実際にモデルに着用したところ、先生やこれまで話したことがなかった同じ受講生からも「good job」と褒められたのが一番うれしかった思い出です。このことで、実力があれば評価してもらえるのだと自信を持てるようになりました。

●アメリカを拠点に活動したい

卒業論文では、「エピテーゼと特殊メイクの可能性」について発表しました。アメリカでは、戦争やテロで、顔などをケガされた方にエピテーゼが活用されています。日本でもどのように応用できるか、今後も模索していくつもりです。卒業後は、樟蔭での学びと国内外での経験、人脈を生かし、特殊メイクやエピテーゼに関わっていきたいと思っています。そしていつか、本場アメリカに活動拠点を置いて活躍できればと思っています。



学 園

「ホームカミングデー2019」を開催しました

10月26日(土)に14回目の「ホームカミングデー2019」を開催しました。ホームカミングデーは、30歳・40歳・50歳・・・と10歳ごとの区切りの年齢を迎えられた卒業生に向けたイベントです。参加者に当時を振り返ってもらいながら、現在の母校について知ってもらうことを目的に開催しています。懇親会では記念映像の放映や、中学校・高等学校の音劇部による校歌斉唱などを行いました。今年は226人の卒業生とその家族が参加し、旧友や恩師との再会に喜び合う姿があらわらで見られました。

また、当日は同時開催の大学祭「くすのき祭」に足を運ぶ卒業生の姿もありました。更に、卒業生を対象に樟徳館の見学ツアーも行い、樟蔭学園創設者である森平蔵氏と深く関係する樟徳館を知ってもらう貴重な機会となりました。多くの人々で賑わった学園は、1日中にぎやかなムードに包まれました。



大学・大学院

「2019年度くすのき祭」を開催しました

「第69回くすのき祭」を10月26日(土)、27日(日)に開催しました。2019年度のテーマは「Happiness～はっちゃける幸せなひとときを～」。

今年のテーマには、訪れた人の記憶に残るような幸せなひとときを創り、「また来年も来たい」と感じてもらえるような大学祭にしたいというくすのき祭実行委員の思いが込められています。

2日間を通じてくすのき祭では、ファッションショーや、袴コンテスト、模擬店、インディーズライブ、ゲストによるトークショーなどさまざまな催しを実施しました。天候にも恵まれ、たくさんの学生、卒業生、地域の方々が参加し、活気あふれる大学祭になりました。



地域の読書活動を支援する「しょういん子育て絵本館」

国内外の絵本や児童書、紙芝居など6000冊を集めた「しょういん子育て絵本館」が完成しました。この絵本館は、「認定絵本土」の資格取得を目指す学生たちの実践活動や教育・研究の場、地域の子どもたちの読書活動を支援する場として活用されます。

開設を記念して9月28日(土)に、開設記念セレモニーと開設記念フォーラムを開催しました。フォーラムでは、児童文学作家のあまんきみこ氏、絵本作家の亀山達矢氏(tupera tupera)、本学児童教育学科長の菅正隆教授の鼎談を行いました。鼎談では、サプライズで亀山氏が『やさしいさん』『おぼけだじょ』を、あまん氏が『ぼんぼん山の月』を朗読すると、会場は歓喜に包まれました。

更に鼎談後、日本テレビアナウンサーで絵本専門士の杉上佐智枝氏による絵本の読み聞かせがあり、作品によって声の調子を変化させる朗読に、来場者は作品の世界に引き込まれた様子でした。

フォーラム終了後には、しょういん子育て絵本館の見学会があり、懐かしい絵本を見つけて談笑する来場者の姿もありました。



開設記念セレモニーのテープカットの様子



開設記念フォーラムの様子



しょういん子育て絵本館で絵本を読むあまん氏と亀山氏

「大学創立70周年記念フォーラム」を開催しました

11月17日(日)、新制大学設置70周年を記念して、「大学創立70周年記念フォーラム～今、なぜ『美』の感性・意識が求められるのか?～」を開催しました。

基調講演では、北尾悟学長がAIをはじめとする先端技術の進展により、社会の在り方が大きく変化している現在において、樟蔭で培った教育を再確認しながら、より一層「美」の感性・価値観の重要性を考えていきたいと語りました。

続く特別講演では、白井文客員教授が「私らしく、美しく」というテーマでSDGsを分かりやすく解説。今できる課題に取り組むことで、女性が置かれている厳しい現状を打開することにつながると話しました。

パネルセッションでは、「学びを通して培われる樟蔭美とは?」をテーマに、白川哲郎副学長がコーディネーターを務め、北尾学長、白井客員教授に在籍生と卒業生が加わり、SDGsの取り組みなどを発表し、闊達なトークを展開しました。

更に学生の活動を紹介するポスターセッションも行いました。来場者は学生の話を興味深く聞き入っていました。



パネルセッションの様子



ポスターセッションの様子

学生が東大阪市文化創造館とコラボ × 文化創造館

化粧ファッション学科は、東大阪市文化創造館が同市内の大学と連携し、協働して文化芸術事業の展開を図る「文化と学生のまちコラボ企画2019」に参加しました。

コラボ第一弾として、9月1日(日)の同館オープンに向け、化粧ファッション学科2年生が「コンピュータデザインA」の授業でスタッフユニフォームのデザインに取り組み、3種類のデザインが採用されました。



学生がデザインした
スタッフユニフォーム



ラグビーをテーマに学生がデザイン・制作したドレス

続く第二弾では、「ラグビーW杯2019」開催にちなみ、「ラグビーのまち東大阪をPRしたい」という思いから化粧ファッション学科3年生が、ラグビーをテーマにしたドレス2着を制作しました。ドレスは、生活デザイン研究室の学生がデザイン画を作成し、構成学研究室の学生とディスカッションを重ねて共同で制作しました。

完成したドレスは、W杯開催中の9月23日(月)～10月4日(金)、同館で展示されると、多くの反響がありました。また、展示期間中、学生主体のワークショップを開催するなど、地域とのコラボ企画を通じて、学生たちの日ごろの学びを披露する機会となりました。

ラグビーW杯ファンゾーンで東大阪市の魅力発信 × 東大阪市



10月13日(日)、大阪市天王寺区・てんしばで開催の「ラグビーW杯2019 てんしばファンゾーン」に、「観光ホスピタリティ論」の授業の一環として国際英語学科と児童教育学科の学生5人が参加し、東大阪市の都市魅力発信ブースの運営に携わりました。

このイベントはラグビーW杯を盛り上げるため、試合中継やラグビー体験、各地域の特色を生かした催しなどを日本各地で開催するものの一環です。学生は「モノづくりのまち」「ラグビーのまち」である東大阪市の魅力を来場者にPRしました。

ブースでは「ねじり切対決」「ねじりく対決」「ねじビルド対決」などのゲームが行われ、学生たちはゲーム参加者を一生懸命に応援し、盛り上げました。外国からの観光客も多く、英語で同市をPRするなど精一杯の笑顔で来場者をおもてなしました。



食堂がリニューアル 愛称は「ベル・エキップ」に決定

大学創立70周年を記念して、大学後援会の寄贈により大学の食堂をリニューアルしました。リニューアルした食堂は、大人数でゆったり座れるソファ席や、コンセントを配備した窓側席など、食事だけでなく、学生の憩いの場として活用されています。

更に大学祭のオープニングで食堂の愛称が発表され、心理学科1年生の●●●●さん考案の「ベル・エキップ(La Belle Equipe)」が最優

秀賞に選ばれました。ベル・エキップ(La Belle Equipe)にはフランス語で「良い仲間」という意味があり、「みんなで食事を楽しめる食堂になってほしい」という思いが込められています。

また「Belle」には「美しい」という意味があり、「Belle」と「Equipe」の頭文字「BE」は、本学のスローガン「美Beautiful」にも通じることからベル・エキップに決定しました。



リニューアルした食堂



食堂の愛称発表の様子

中学校・高等学校

「2019年度若葉祭・文化祭」を開催しました

2019年の中学校・高等学校の若葉祭・文化祭を9月27日(金)と9月29日(日)に開催しました。今年のテーマは「今年の我らは風雅にうたう」。樟蔭に伝統として受け継がれている「知・情・意」の理念のもと、Little Ladyとしての思いをそれぞれが表現しようという意味が込められています。1日目は、毎年恒例の生徒だけのクラブやクラスによる舞台発表。中学生による合唱やダンス、ミュージカルなど様々なパフォーマンスを繰り広げました。2日目は、模擬店、ライブ演奏、演技発表、作品展示など工夫をこらした企画が催され、多くの家族や友人でにぎわいました。

今回の文化祭も、生徒の日ごろからの努力がいっぱい詰まった「女子校ならではの文化祭」となりました。



「燃えろ! 惚れろ! We change!」を開催しました

10月9日(水)、丸善インテックアリーナ(大阪市中央体育館)で体育祭を開催しました。

昨年に引き続き、中学校・高等学校合同で行い、当日は中学1年生と高校3年生の真剣勝負が展開しました。中学生が勝ったり、逆に高校生が貫録を示したりと、合同開催ならではの盛り上がりを見せました。中でも高校3年生がクラス対抗でダンスを競い合う「青春の躍動」はとても華やかで、最高潮の盛り上がりとなりました。衣装にも工夫を凝らした各チームの熱演は、いずれも素晴らしいもので、クラスの団結力と練習の成果を見事に見せてくれました。

